

治療師組合

「これを覚えておきな」

治療師はそう言つて盗賊に会つた時の対処法を教えてくれた。

「まず治療師であると相手に告げる。まあ大抵はこの服を見ればわかるがね。見習いだなんて余計なことは言わないことだ。それから、怪我人や病人がいれば診てやると言つ。さらに、もし治療師に危害を加えるならば、お前たちもお前たちの子供もそのまた子供も今後病気になるって治療師に診てもらえないと思えと言つんだ。それでも危害を受けそうになったら、熱と膿と咳、痛みと苦しみに呪われてあれ！と、こつ言つんだよ」

街へと向かう道では盗賊が出ることもあると
いうので、治療師は教えてくれたのだが、長い道のりの退屈しのぎのおしゃべりという方が近いのかも知れない。

「まあねえ、この服を見て襲ってくるやつはいないと思つがね」

そんな話などをしながら歩いていると、やがて街へと向かう広い道に出た。その道は近くの街

ともつと遠くの別の街を結ぶ街道であった。

街道は荷馬車や荷車を引いて歩く人や治療師とリタのような徒歩の旅人で賑わっていて、とても盗賊が出そうには見えない。

二人は治療の話題を避けて、村の噂話などしながら歩いていたが、治療師は荷の軽そうな荷馬車を手を振って止めて、二人はその荷馬車に乗せてもらった。

「あなたとあなたの家族を病が避けて通るよう
に」

「どうぞ、馬にも」

「この馬たちを病が避けて通るように」

「有り難いことで」

治療師は御者席に座ったが、もう場所がなかった。リタは荷台の方に乗った。治療師は御者と世間話をしていたが、リタは荷台から街道を行く人々や、周りの景色を眺めていた。

やがてリタはここ数日の疲れが出て眠くなってきた。荷台の縁に腰かけていたリタは、居眠りして荷台から落ちそうになった。慌てて中ほどに座り直した。

荷馬車に乗っていくのは歩くよりずっと楽だが、速さは歩きより少し速いくらいである。農

夫も馬を大切にしているから、無理はさせないのだ。

昼になると農夫は馬を止めて、荷台から水の桶を下ろして馬に飲ませた。飼葉も与えてから、自分の弁当を広げる。街道が埃っぽいので、リタは馬の水桶から少し水を分けてもらってうがいをした。それから治療師とリタも持ってきたパンとチーズで食事にした。

徒歩の旅行者は木陰に入って休んでいるものもいるが、木陰には荷馬車を乗り入れる余地はないし、農夫は荷馬車から離れたくなかったのだろつ。

「そっちの娘さんも治療師かね」

食事を終えた農夫がリタに話しかけて来た。

「まだ見習いな」

「どうかね、見習いが終わったらうちの村に来てもらえないだろうかね」

「どこに行くかは見習いの決められることじゃないのさ。治療師が欲しかったら、組合に言っておくことだね」

「もう何年も前から頼んでいる筈だがね。一向に順番が回って来ないんで」

「もう一回頼んで見るんだね。あたしたちは組

合に行くから、組合の前までこの荷馬車で行ってくれるなら、その時に取り次いであげるよ」

「ああ、有り難いことで」

「どこに治療師を派遣するかは組合が決めることだからね。頼んだからつてすぐに来るかどうかはわからないよ」

「そりゃあもう承知しとるで」

それからまた二人は荷馬車に乗って街に向かつて進んでいった。やがて馬車は大きな門を通り、街の中に入って行った。市場に行く途中で農夫は治療師組合を通り、そこで治療師とリタを下ろした。

治療師はリタに少し外で待っているようにと言つて、農夫を連れて組合の建物の中に入った。

リタは待つている間に町の様子を眺めた。街は街道以上に賑わっていて、街道よりも狭い道を多くの人が行き交っている。忙しそうに早足で歩いている人もいれば、何の目的で歩いているのかあちこちに目をやったり、立ち止まったりしてゆっくり歩いている者もいる。

家の前で二三人で集まって、何を話しているのか時々大きな笑い声を挙げている女たちや、何を揉めているのか大声で怒鳴りあっている男た

ちがいる。

突然赤ん坊の泣き声が響いたかと思うと、猫が足元を走り抜け、犬が吠える。負けじと商人が呼び声を張り上げ、お調子者が鼻歌を歌って踊り歩く。

道に沿って家が隙間もないほどに立ち並び、家と家との区切りは新旧の煉瓦の色合いの違い、煉瓦を繋ぐ漆喰の汚れや蔦が這っているかどうかでしか分からない。平屋の家など一軒もなく、どの家も二階建や三階建である。

道も煉瓦で舗装されていて、馬車が通っても街道のように土埃が舞うこともない。

治療師組合の建物は古い煉瓦造りで、建物全体にびっしりと蔦が這って、植物の生命力を借りて人の病気を癒す治療の技を象徴しているように見えた。

農夫が治療師組合から出て来て、代わりにリタが呼ばれた。農夫は少し晴れやかな表情で荷馬車を市場に向かって走らせていった。

組合の建物に入ると、小さな部屋があつて小さなテーブルが一つと椅子が二脚置いてあつた。見知らぬ治療師が椅子に座っていて、治療師ハシナが奥に立っていた。

「これがいま言っていたあたしの見習いだよ。リタ、挨拶しなさい」

「あたしはリタ。治療師ハンナの見習いをして
いるの」

「あたしはナリアよ。治療師ターニアの見習いよ」
リタはその大人びた女性が見習いなのに驚いた。見習いの期間はリタが思っていたよりずっと長いのかも知れない。ナリアは入り口の部屋で組合を訪ねて来た病人や治療師の派遣を要請する村人の受け付けをしているのだという。

「さあ、リタ。こっちにおいて」

治療師ハンナと一緒にリタはドアを開けて奥の部屋に入った。その部屋には竈が三つもあって三つの鍋が掛かっていた。一つはただのお湯のようだが、他の二つは何を煮ているのか分からない。薬草の匂いが立ちこめていて、治療師だけ見習いだか三人が働いていた。

薬を作る専門の部屋のようだ。干した薬草は見当たらないから、それはまた別の部屋があるのだろう。この建物だけで何人の治療師がいるのだろうか。治療師のいない村もあるのに信じられないほどだ。

治療師ハンナは入ってすぐ右のドアを開けて横

の部屋に入った。そこは小さな部屋で机と椅子があり、年老いた治療師が机に向かって座り、手紙を読んでいた。

「組合長、うちの見習いのリタを連れて来たよ。リタ、この方がポルタ組合長だよ」

「ああ、ハンナ。あんたもとうとう見習いを取ったんだね。結構なことだね。なかなか賢そうな娘じゃないか」

「いや、それが困ったことがあってね。ちょっとこの娘が不始末をしでかしたものだからね。リタ、お前が自分で説明してごらん」

それでリタは組合長に媚薬を治療師に無断でサラに渡してしまったことを話した。そして罰を受けるためにここまでやって来たと言明した。

「なるほど、そうかい、うん、わかったよ。リタ、お前は自分のやったことが罰に値すると思うかね」

「はい」
「そうかい、じゃあ罰を受ける覚悟は出来ているんだね」

「はい」
「ハンナ、お前はどのくらいの罰を考えているんだね」

「百叩きか、その半分というところかね」

「ほう、そうかい。いい見習いを見つけたね。だが、近ごろ懲罰組合は値上げをしてね。百はちよつと高いんだよ。五十でいいんじゃないかね」

「あの、お金が必要ならあたしが払うわ。だって悪いことをしたのはあたしなんだもの」

「なるほどねえ、こういふ娘かね。いや、リタ、そうはいかないんだよ。お前は悪いことをしたことに對して罰を受ける。しかし、お前が悪いことをしたのには治療師ハンナの責任もある。いいかね、どんなことであれ見習いのしたことには担当の治療師は責任があるんだ。だからハンナはお前を罰する必要があるというわけだね。けれど治療師は人を傷つけることが出来ない。罰しようとしても手加減してしまうだろう。それで懲罰組合に頼まなければならぬんだよ。だからお金はハンナが払うべきなんだよ」

リタのしたことがすべて治療師ハンナの責任になると知っていたら、リタはもっと慎重に行動していただろう。これからはそのことを忘れずに行動するようにしなければならぬとリタは思った。

「その上、組合員のしたことには全部、組合長

は責任があるんだよ。それにやったことを考えても五十が妥当だとあたしは思うね」

「リタ、五十叩きは決して軽い罰ではないからね。治療師が叩くんじゃなくて懲罰組合の男が公平に叩くんだから。お前だって耐え切れるかどうかわからないよ」

「わかったわ、五十でいいわ」

「はは、面白い娘だね。こんな娘が見習いだったら飽きないだろうね」

「それでもないもんだよ」

「じゃあ、治療師ハンナ、リタを連れて懲罰組合に行っておくれ」

治療師ハンナは利他を連れて組合長の部屋を出て、組合の建物を来た時と逆に辿って街路に出た。治療師は道をよく知っているようで、細い路地を通って近道をしたりしながら進んでいった。

「治療師は懲罰組合に行ったことがあるの？」

「ああ、何度もね」

「やっぱり、悪いことをした見習いを連れて行ったの？」

「いや、あたしが罰を受けに行ったんだよ」

「治療師が……」

「なんだね、そんなに不思議かね。誰にだって

間違いはあるもんだらうが」

リタは治療師の言いつけに背くような見習いは自分だけかと思っていたので少し気が楽になった。

「街に住んでいる人なら一度や二度は懲罰組合の世話になるもんだよ。いたずら好きな子供を懲らしめるのにも懲罰組合に頼むことがあるからね」

「まあ、可哀想に」

「なあに、懲罰組合だって子供には手加減するさ。それでも親よりはよほど厳しいだらうがね」

懲罰組合の建物は街の外れにあった。飾りのない地味な建物だったが、リタは中から悲鳴が聞こえてくるのではないかと思った。いつの間にか足音を立てないようにして歩いていった。

治療師が黙って先に建物に入ったので、リタも続いて入った。

入口の部屋には治療師組合と同じように見習いらしき人が受付けをしていた。治療師はその人に五十叩きを依頼して代金を支払った。それから、受付けの人が立ち上がってリタに付いて来るように言って奥の部屋に入った。

リタは奥の部屋で懲罰士に引き渡されて、狭い

通路を通り、階段を降りて地下に入った。地下にはいくつかの部屋があったが、その一つにリタは通された。

地下室は暗くて何があるのかよく見えなかったが、懲罰士が蝋燭に火を灯したので、明るくなった。部屋の周りは土の壁になっていて部屋の四隅と中央に柱が立っていた。中央の柱には高さを違えていくつかの棒が横に突き出していた。

懲罰士はリタにその棒の一つを握るように指示した。それから、リタの足を置く位置を指定した。手と足の位置が指定されると、リタは自然と尻を突き出した格好になった。

それから懲罰士は大きな革の手袋を右の手にはめた。きつと手が腫れないように守るためのものだろう。

「ひとつ」

懲罰士がそう言ったので、リタは身構えた。懲罰士の手がリタの尻を打った時、衝撃は尻から背中を走り脳天から突き抜けて出て行った。衝撃は大きかったが、リタはあまり痛くないような気がした。どうしたんだろう、打ち方を間違えたのだろうか。そういう時はもう一度やり直しになるのだろうか、それとも構わずに続けて

打つのだろうか。

しかし脳天から出て行っただと思っただ痛みは、もう一度尻から広がって来た。痛い、すごく痛い。やはり懲罰士の叩き方は一流だとリタは思った。

「ふたーっ」

再び衝撃がリタの体を走り抜けた。リタは歯を食いしばり、息を詰めて耐えた。懲罰士はリタが悲鳴を上げずに歯を食いしばっているのを見ると、畳んだ布を持って来てリタの口の歯の間に入れた。それがあつた方が歯を食いしばる時に力が入れやすい。

「みいーっ」

今度は布を噛んでいたので耐えやすかった。それから、これは罰なのだから本当は痛い思いをしなければならぬのではないかという気がしてきた。だとしたら歯を食いしばって耐えるのは良くないのではないか。

でも懲罰について一番詳しいはずの懲罰士が布を持って来てくれたのだから、歯を食いしばって悪いことはないのだろう。きつと痛みを感じることよりも、自分の悪い点をきちんと反省するということの方が重要なのだ。

そこでリタはもう一度自分の悪かった点を考え

てみることにした。もちろん治療師に無断で媚薬をサラに渡したことが悪い。けれど、あの時リタはそうしてはいけなかったのだ。治療師に訊ねてから渡すかどうか決めなくてはならないと確かに一度は思ったのである。それがリタの最も後悔する点であった。そうしてはいけないと思ったのに、してしまったこと。悪いとわかっていてしてしまったことが本当は一番いけないことなのかも知れない。

「よーっつ」

どうして悪いと思ったことをしてしまったかというと、それはサラに頼まれたからだ。でもサラのせいにしてはいけなくと思う。きっとサラを友だちとして扱ったのがいけなかったのだ。サラはもちろん友だちだけれど、薬を求めに来た時は病人と治療師見習いという関係になるのだろう。だからわがままをいう病人に対するようにサラに対して毅然とした態度を取らなければならなかったのだ。

「いっつーっ」

そしてもう一つ悪かった点は一回にどれだけ媚薬を使うのかをサラに伝えなかった点である。それはリタも知らなかったから言えなかったのだ

が、リタも媚薬を少しずつ何度も使うとは思わなかったのである。

それはリタが薬の作り方までは習ったが、作った薬の与え方はまだ習っていないからで、薬草の見分け方から薬の作り方と順に教わって来たのだから、きつと治療師は次に薬の与え方を教えるつもりだったのだろう。

それなのにリタは媚薬を自分の手で作ったので、もう媚薬のことはわかった気になってしまったのだ。もう自分で薬を作れると得意になっていたのかも知れない。

「むっっ」

見習いになる前もリタはちょっと知っただけで全部わかった気になって失敗をしたことがあった。どうもなにかうまくいくと浮かれて調子に乗ってしまう。自分はなんでも出来ると思い込んでしまう。それがよくないのだと思う。

「ななっ」

リタが自分の行いを反省する度に、その通りおまえはいけない子だと懲罰士の手が尻に当り、痛みが体を走り抜ける。そしてリタはもう治療師のいっつけに反したりしない、治療に関係したことでは治療師見習いという立場を忘れたり

はしないと心に刻みつけた。

もうわかってもないことをわかった気になつたりはしない。調子に乗ってなんでも出来ると思いつたりはしない。

「やあっつ」

痛みが体を走りぬける。そして尻はもう腫れ上がっていて、叩かれていない時でもひりひりと痛む。叩かれた痛みも頭を突き抜けて出て行かないで体の中に留まっているようだ。

リタはもう反省することを思いつかなかつた。それでも懲罰士の手はリタの尻を叩きつづける。どうしたらいいかわからなくなって、リタは涙を流しはじめた。

「ここのおつ」

きつともう反省することがないなどと思うことが思い上がりなのだ。そう思っても何も思いつかない。ただ尻の痛さだけが耐え難いほどに響く。そしてようやくリタはこれが罰なのだということがわかった。反省を促すためではなく単に痛みを与えることが目的なのだ。

罰を与えられる人は反省して同じ過ちをしなくなるのではなく、この罰の痛さに懲りて間違いをしなくなるのだ。だからリタが今しなけ

ればならないことは反省することよりも、この痛みを感じ心に刻みつけることなのだ。しかしそんなことを意識しなくても、この痛みは一生忘れられそうもなかった。

「とーお」

懲罰士はリタの尻を打つと床の上に小石を置いた。なんだろう、今度はあの石で打つのだろうか。今の痛さもほとんど耐えられない程なのに石で打たれたらどうなるかわからない。それに治療師見習いとして立場からしても、石で打つのは勧められない。体に後々まで残る傷が付くのではないだろうか。

「ひとーっ」

懲罰士はまた一から数え始めた。石は十数えたという印のようだ。懲罰士は十以上は数えられないのだろうか。百叩きという罰がある以上、懲罰士が数えられないということはないはずである。だとすると十ごとに石を置くのは罰を受ける人のためだろう。

罰を受ける方は大きな数が数えられない人もいるかも知れない。それに十ごとに石を置いてくれればあとのくらいかもわかりやすい。リタは五十叩きだから、石があと四つ置かれれば

終わりということだ。

「ふたーっ」「みーっっ」

リタはただ痛みを耐えつづけた。目に怪我をした時も痛かったけれど、あの時はすぐに気を失ってしまつて、気付いたのは治療師の手当てを受けた後だつた。一番痛い時は経験していない。

ふとリタはこの罰が終つたら痛み止めの薬草を飲んでもよいのだろうかと思つた。罰で与えられた痛みなのだから、薬を飲んではいけないのかも知れない。

治療師がいなければ、病人や怪我人も痛みを止める方法はないのだ。いまのリタは治療師のいない村の怪我人のようなものではないだろうか。激しい痛みが襲つてきても逃れる方法はない。

そうすると心が痛みのことだけで一杯になつてしまふ。だから怪我人の中には暴れて治療を拒否するものや、薬を飲んでも痛みが引かないといつて治療師を非難する者もいるという。それは仕方のないことだとリタはわかつた。痛みは心を支配してしまふのだ。

けれども歯を食い縛っていると耐えることが出来る。それは不思議なことだ。歯と尻の痛みにどんな関係があるのだろうか。痛くなくな

る訳ではない。きつと痛みの強さは変わらないのだろう。それでも耐えることが出来るようになる。耐えるというのはどうということなのだろうか。

リタは試しに歯を食いしばらないで耐えてみることにした。そして懲罰士に叩かれた時、鮮やかな痛みが全身を走り抜けるのがわかった。そして口からはうめき声が漏れた。けれど気がつかないうちに両手で棒を力一杯握り締めていた。

歯でなくてもどこかに力を込めていると耐えやすいのかも知れない。しかし怪我人の痛みはずっと続くのだから、ずっと力を入れたままにしておくことは出来ない。だから薬草が必要なのかも知れないとリタは思った。

打たれる時に力を込めているので、その後はあはあと荒い息づかいになってしまふ。そしてその時はジーンとした痛みが広がってくる。それは打たれた瞬間の痛みとはまるで違う種類の痛みだった。

そして打たれた瞬間の痛みが体を突き抜けてなくなってしまうのに比べて、ジーンと響く痛みは蓄積されてどんどん大きくなってくる。

歯も腕も疲れてだんだん力が入らなくなっていく

る。そうすると痛みは耐え難いものに思えてくる。あとのくくらい耐えなければならぬのだろ。リタが地面に置かれた石を見てみると、それは三つあった。

半分は過ぎたということが分かった。リタはもう細かいことは考えられなかった。ただ早く叩き終わって欲しいと思うばかりだった。そして懲罰士が尻を打つ痛みも、一つずつ終わりに近づいていると思うと、つらいのかどうか分からなくなってきた。

リタはもう歯を食いしばることも、体に力を込めることも出来なかった。打たれた時も打たれる間の奇妙に長い間隔も、どちらも同じように全身に痛みが感じられた。今ではただ痛いという感覚があるだけで、どこがどのように痛いのか考えることは出来なかった。

リタの頭にあったのは、五十叩けば終るということと、それは石が五つ並んだ時だということだけだった。床に並べられた石を見てみると一ただけ白い石があった。けれどもリタはそれを見て何も考えられず、ただ白い石があると思った。そのことはリタにとって何の意味も持たなかったが、一つだけある白い石にリタの視線は

引きつけられた。

なんだか間隔が長いと思っていたら、懲罰士が何か言っていた。けれどもリタには何を言っているのかよく分からなかった。治療師の声もするようだが、懲罰の最中に声を掛けるはずがない。

それから、懲罰士が床に石を置いた。それでリタが数えてみると石は五つあった。五つの石を見てから、さっきから懲罰士が何か言っていたのは「終わり」という言葉だったということが分かった。

終わったと分かってもしリタはそれからどうしていいか分からず、懲罰士がリタの手を取って棒を放すように指示した時も、何をしていいのか分からず、しばらく必死になって棒を握り締めていた。

治療師が近づいて来てリタの服の乱れを直した時に、服が尻に擦れて痛くて、リタはようやく終わったということを実感した。

「リタ、大丈夫かい」

治療師の言葉は聞こえたが、リタはちゃんと返事が出来なかった。

「白い石がある」

「なんだって」

「あそこに白い石がある」

「それがどうしたっていうんだい。ちょっと頭は大丈夫かい？ 強く叩きすぎたんじゃないだらうね」

懲罰士は一時的におかしくなる人もいるが、すぐに治ると答えた。

リタは手で握っていた棒を放すと、膝に力が入らずに倒れそうになった。治療師が支えてくれて倒れずに済んだが、とても一人では歩けなかった。すると治療師がリタを背負って治療師組合まで運んでくれた。普段ならリタは治療師にそんなことをさせなかったが、頭が朦朧としていて、治療師に言われるがままに背負われた。

組合に着くと、リタはふかふかのベッドに俯せに寝かされて、尻に傷薬を塗ってもらった。そして痛み止めの飲み薬を飲んでそのまま俯せで居るように言われた。

しばらくすると痛み止めが効いたのか、とても眠れないと思ったのに少し眠ったようだ。目が覚めた時、痛みはあったが頭はすっきりとしていた。ベッドのそばに治療師が座っていたが、リタが目を覚ましたことに気付くと一度部屋から

出ていって、パンとスूपを持って戻って来た。

「こんなに痛いとは思わなかったわ。すっかり懲りたわ」

「そうでなきゃ困るよ。お金を払って叩いてもらっているんだからね」

「でも罰で叩かれたのに、傷薬なんてつけていいの？」

「終れば何をしたらって構わないのさ。だいたい子供を懲罰組合に連れて行った親は、帰りには治療師組合に寄って子供の治療をしていくもんだよ」

「それっておかしくないかしら」

「何もおかしいことはあるもんかね。罰を与えるのも子供のため、治療するのも子供のためだろうがね」

「でも、見習いは別よね。お金を払って罰を与えた上に治療までしたんじゃない合わないんじゃないかしら」

「違いがあるもんかね。それより、あたしは用があつて来たんだからね、お前の側にいつまでもいるわけにはいかないだよ。帰る時は一緒に帰るんだから、一人で先に帰らないでくれよ。それまでは寝てようがぶらぶらしてようが

構わないけれどね」

治療師はそう言って出て行ってしまった。

リタのいる部屋は治療師組合の中の一部屋で、ベッドと椅子があるだけの小さな部屋だった。ただベッドは特別製で、リタの家や治療師の家のよつなむき出しの藁のベッドではなく、布のシーツが敷いてあるベッドだった。そのシーツの下も藁ではなくて何か毛布のような柔らかいものが詰まっているようだ。

きつと領主様やその身内の方のような尊い方が治療を受ける時に使う部屋なのだろう。それをリタが使わせてもらっているのは、そういう高貴な方はたいへいは治療師を屋敷に呼びつけるので、あまり使われることがないからだろう。

トイレに行きたくなってリタはベッドから降りたが、じつと俯せになって寝ているとあまり感じなかった尻の痛みも、動くとかかなり痛かった。立ち上がって見ると部屋の窓には教会にあるよつなガラスが嵌めてあった。風を入れるために少し開けてあったけれど、この窓なら雨の日でも窓際で書き写しをすることが出来そうだ。

トイレから帰って再びベッドの上で俯せになってリタは考え事をした。罰を受けたことでリタ

の心はすっきりした気持ちになっていた。悪いことをしたということをおぼれたわけではないけれど、その償いはしたのだ。もう間違いは繰り返さないつもりだ。

やがてリタは眠り込んだ。自分の足で歩いたのはわずかな距離だが、それでも旅というものは疲れるからだろうか。あるいは叩かれている時に全身に力を込めて耐えていたので疲れたからだろうか。それとも罰を受けたことによって罪の償いが済んだという気の軽さからだろうか。リタは俯せの不自然な姿勢のまま朝までぐっすりと眠った。

翌日、リタの尻の痛みはかなり軽くなった。椅子に座ったりするのは痛くて出来なかったけれど、じっと立っている分にはほとんど痛みはなかった。懲罰士の打ち方がその日だけの痛みで収まるような打ち方だったのだろう。それに治療師組合の傷薬もよく効いたのだ。

朝食は作業所と呼ばれる治療師や見習いが薬を作っていたところでみんなと一緒に食べた。食事はパンとバターと野菜のスープだったが、リタだけは立ったまま食べた。食事中も治療師た

ちはその日の仕事の話で忙しく、罰を受けたリタを責めるようなことを言う者はいなかった。

「痛かった？」

食器を片付ける時に通りかかった見習いのナリアが声を掛けたが、返事も待たずにそのまま通り過ぎていった。からかうような調子ではなくて、どちらかというと同情を示しているようにリタには思えた。

寝ているほど具合は悪くないし、かといって椅子に座ると尻が痛いので食事の後リタは立ったままなんとなくうろうろしていた。組合の治療師や見習いが忙しそうに通りすぎるので邪魔にならないようにあっちに避けたり、こっちに避けたりしていた。

「暇ならちょっと来ておくれ」

治療師ハンナが呼んだので、リタは喜んで付いて行った。

行った先はテーブルと椅子とその他見たことのない道具が並んでいる小部屋だった。

「こついうことは治療師の仕事じゃないんだが、だからと言って、他の人にやらせる訳にはいかないからね」

治療師はそう言ってリタが書き写した紙の束を

持ち出してきた。これからこの紙を本にすると
いう。リタはその製本という言葉聞いただけ
でなんだか嬉しくなってきた。

「遅れてごめんなさい」

見習いナリアが部屋に入ってきた。

「このナリアが新しい製本の方法を仕入れてき
たというんでね。その方法を試してみたいとい
うんだ。ちょうどお前の書き写したのを製本し
なけりやならなかったからね。これでやってもら
うことにしたんだよ。お前はナリアのやり方を
よく見て覚えておくんだよ。あたしや今さら新
しいやり方を覚える気にはなれないからね。ま
あ治療の技とは関係ないことでもあるしね」

治療師はそう言って出ていってしまった。

「初めて試すのよ。それでうまくいかなかった
らごめんなさいね。全部だめになっちゃよう
なことはないと思うけれど、もしかしたら一枚
か二枚書き直すことになるかも知れないわ」

ナリアは新しい技術を実地に試すのが嬉しく
て仕方がないようだ。目をキラキラと輝かせて
いる。

「書き直すくらいなんともないわ」

「よかったわ。実はこれは修道士のやり方なの

よ。何といつても本の作り方は修道士が上手だわ。それで修道士と知り合いになつて、ちよつと本を見せてもらえないかと頼んだのよ。そうしたら、そんなに神の言葉を知りたいならば一冊あげようつていうの。あたしは別に神の言葉なんか興味がなくて修道士が本をどんな風に綴じているのか知りたかつただけなんだけど、呉れるつて言うつからもう一つことにしたのよ。もらつてすぐに家に持つて歸つて丁寧に分解してどうなつているか調べたの。そうして本を分解して置いてあるところにその修道士が来て、小さなメモをなくしてしまつたのだがあの本の間挟んでなかつたかと言つたのよ。そして分解してあつた本を見ると急に物凄い表情になつて何か言おうとしたようなのだけれど、怒りのあまり言葉も出ないという様子なの。あの時は本当に怖かつたわ。修道士はしばらく恐ろしい形相で分解された本を睨んでいたけれど、やがて黙つてくると振り返つて出て行つてしまつたわ。そりゃあ貰つたものを分解してしまつたのは悪かつたけれど、今ではもう元どおりに直つているのよ」

それからナリアはリタの書き写した紙の束を見て考え込んだ。

「そうよね、修道士たちはその綴じ方に合わせて書き写しをしてるのよね。このままじゃ綴じられないわ。どうしたらいいかしら」

ナリアはしばらく独り言を言いながら考え込んでいた。

「ごめんなさい。うまくいかないかもしれないけれど、あたしどうしても新しい方法でやってみたいの。これがあたしの悪い所なのよ。本当は治療師に向いていないのだから。だって、病人にうまくいくかどうか分からない新しいやり方を試すよっじゃ駄目でしょ。それでいつまでたっても見習いのままなのよ。でもあたしは死にそんな病人の相手をするよりも、こうやって製本したり薬を作ったりする方が好きなの。だから見習いのままでもちつとも構わないわ」

ナリアはリタの書き写しを修道士のやり方で綴じられるように準備することにした。二枚の書き写しを細長い紙で繋いで一枚にする。リタと二人でその作業をしたが、糊を使って紙を貼ったので乾くまで次の作業に進めない。

「製本って終るまでにどのくらいかかるの？」

リタはあまり村を留守にできないと思って聞いてみた。

「そうね、三日か四日はかかるかもしれないわ。糊の乾くのを待つ時間も含めると」

「そんなにかかるの。治療師ハンナに聞いてみないといけないわ。だってあまり村を留守に出来ないから」

「そうね、あたしは仕事の合間にやったので気にならなかつたけれど、二人ともずっとここにいるという訳にはいかないわよね。よかつたら、あたしがこの書き写しを預かって製本が終つたら届けるようにするわよ」

「とにかく治療師ハンナに聞いてみるわ」

リタは組合の建物の中を探して歩いて、ようやく組合長と話している治療師ハンナをみつけた。

「そんなに時間がかかるのかい。それだったら、昔の簡単な綴じの方が良かったね。まあ、この新しいやり方で綴じるかどうかは分からないけれど、もうやり始めてしまったものはそのまま続けるしかないだろうが。お前、尻はもう痛くないのかい？」

「まだ座ると痛いわ」

「そうだろうよ。そんなんじゃないあ、帰っても見習いの仕事を十分には出来ないだろうが。だからお前はここに残つてとにかく製本が終るまで

ナリアの手伝いをしな。あたしは今日にでも村に帰ることにするよ。組合長、それでいいかね」「ええ、いいわよ。ここはいつも人手が足りないから、しばらくここに居て、他の見習いたちと一緒に働いてもらえると助かるわ。ナリアと一緒に仕事をするんだったら、治療師ターニアの指示に従って頂戴」

リタはナリアのところに戻って、製本が終るまで組合に残ることになったと伝えた。そしてナリアと一緒に治療師ターニアのところに行って、しばらく御世話になると挨拶をした。

治療師ターニアは穏やかな人柄の年老いた治療師だった。

「ああ、人手が増えるのは助かるが、何日もいないんだろっし、組合のどこに何があるかという勝手もわからないだろうから、ナリアの手伝いをしてくれないかね。見習いの見習いみたいで悪いがな、製本の合間に仕事をするんだったらその方が都合がいいだろう」

リタがしばらくナリアの手伝いをしていると、昼前に治療師ハンナが顔を出して今から帰るかと言った。リタが治療師組合の玄関まで見送ると、治療師ハンナは来た時よりもずっと立派

な馬車に便乗して出発した。

その夜、リタは他の見習いと一緒の部屋で寝た。疲れているだろうに、見習いたちは街の若い男の誰がハンサムだとか、修道士の中にかわいい男の子がいるとかいう話をずっとしていた。

次の朝、ナリアとリタは製本の続きの作業をした。糊の乾いた紙を二つに折ってもう一度ページの順になつていているか確認した。それからナリアは木の台に麻の紐を三本張つて、そこに二つに折つた紙の折り目を当てた。そして紐の当る折り目のところにペンで印を付けた。

一度紙を台から外して万力の間に挟み、印の所の三ヶ所と印のついていない外側の二ヶ所を、目の細かい糸鋸で軽く切つた。それから厚手の大きな紙を持ってきて、張り合わせた紙と同じ大きさの紙を二枚作つた。それを二つに折つて紙の束の前後に置き、同じ位置に今度はピンで穴を開けた。

その紙をまず紐を張つた台の上に一枚置き、穴に針を通していった。書き写しの紙を一枚とつてまた糸を通していく。するとちょうど紐を紙に縫い付けているようになる。

リタはナリアの作業を見ているばかりだった。

針を使っているので手を出すと危ないし、かえって邪魔になるだけだ。リタは紙の順番を確認しながら一枚ずつ紙をナリアに手渡した。

最後にまた厚手の紙を紐に縫い付けると、書き写しの紙の束は両側を厚手の紙に挟まれてきれいに綴じられた。

「わあ、すごく立派に出来たわね。書き写していた時にはこんなに立派になるとは思わなかったわ」

「まだ出来てないのよ。立派になるのはこれからだわ」

ナリアは紙の束の大きさを測って、いろいろなもの大きさをそれに合わせて切り出した。最初に使ったのは寒冷紗で、それを本の背に貼った。その前に背を止めていた紐の余った部分をほどいて広げ、寒冷紗を貼った時にその厚みが目立たないようにした。さらに背の部分には寒冷紗を貼った上から、筒状に張り合わせた紙を貼った。

それとは別に本の背と前後の紙の大きさに合わせて厚紙を切り、それら全体を包む大きさの革を用意した。それから革の端を薄く漉き、厚紙を糊で貼り付けた。ここでまた糊が乾くまで一日置いた。

その一日のあいだにいろいろな出来事があったのだが、ともかく翌日、寒冷紗の上に紙の筒を貼ってあったところに、厚紙つきの革を貼り、紙の束の最初の一枚と最後の一枚も革の裏の厚紙に一面びったりと貼り付けて、最後に革の折り返しやらをきれいにまとめて製本の作業は終わったのである。

製本作業の合間にリタはナリアの雑用を手伝っていたが、もともとナリアひとり分の仕事だったから、二人でやるとすぐに終って時間が開いた。「リタ、ちよつと暇が出来たから街を案内しようか」

リタは村とは違う街並みに興味があったが、治療師ハンナのいないところで仕事を怠けることに抵抗があった。

「大丈夫よ、革職人の所に行つて革を買つて来なければならぬの。そのついでにちよつと遠まわりをして街を案内するわ」

リタが躊躇っているのを見てナリアはそう言った。治療師ハンナもよく仕事の帰りに寄り道して話し込んだりしていたから、それならいいだろうとリタは考えた。

「わかったわ。実はずっと街を見物したくて仕方がなかったのよ。懲罰士組合に行く時に街の中を通ったけれど、その時は見物する気分じゃなかったの」

リタのお尻の痛みもこの時にはもう消えていた。ナリアは初めは大通りを歩いて、あれがどの組合の建物だとか街の名士の家だとか説明していたが、途中から細い路地に入った。

「汚いのよね」

ナリアの言つとおり、路地には汚物の匂い立ちこめていた。リタもその汚さと臭さに驚いた。村にはこんなに臭い所はない。豚飼いの豚だつてこれほどひどい匂いはしなかった。

「この路地だけじゃないのよ。みんなこつなの。治療師ターニアはこの汚さが病気の原因になるつて言つ」

しかし他の治療師たちはそうは思っていないかった。汚い乞食も着飾った領主も同じように病気になるからだ。

「病気の原因じゃなかったとしても、なんとかならないものかしら」

「汚物処理の組合でも作ればいいと治療師ターニアは言つただけれど、一体誰が喜んでそんな

組合を作るといふの。一体誰がその組合に入りたがるの。だいたいその組合はどうやって生計を立てるのかしら」

ナリアは再び大通りに出て、お菓子屋に入って砂糖菓子を買ひ、一つをリタに渡した。二人でお菓子を食べながら、革職人の所に行つて漉いた牛革を買つてきた。

革職人の店を出ると、ナリアは丘の上を指差してリタに説明した。

「あれが領主様のお城なのよ。でも用もなしに近づくと警備兵に叱られるから、ここから見ただけにしてね」

リタはお城と聞いて、物語に出てくるような大きな城を連想したが、その場所からは城壁の一部しか見えず、大きいのか小さいのかも豪華なのか質素なのかもわからなかつた。

それでもリタはしばらく城を眺めていたが、やがて丘の上から一台の馬車が走ってくるのに気がついた。

「ナリア、馬車が来るわよ」

「本ただわ。もしかしたら病人が出て治療師を呼びに来たのかも知れないわよ。すぐに帰らなくちゃ」

ナリアを呼びに来たわけではないと思ったが、リタも病人が出たと聞くと急かされる気がして、二人で走って治療師組合に戻った。

二人が治療師組合に着くと同時に領主の馬車も到着した。飾りの多い立派な馬車で馬も太って毛並みがよい。二人は急いで裏口から建物に入った。

「誰が病気なのかしら」

「それは呼ばれた治療師が戻らないとわからないわね」

しかし組合長が選んだ治療師はターニアだった。そして治療師ターニアはナリアとリタにも一緒に来るように言った。慌てているリタに構わず、ナリアは治療師ターニアの鞆を用意した。

治療師ターニアに続いてナリアが領主の馬車に乗り、リタもその後から乗った。リタが座席のクッションの厚さに驚いているうちに御者は馬車を動かした。